別記第３号様式

平成２０年度　事後評価調書

機 関 名　　アイヌ民族文化研究センター
研究責任者　研究課長　古原　敏弘
研究担当者　研究職員　小川　正人

課題番号	ア文研一般2007	研究課題名	吉田巌関係資料の調査研究
課題担当者	１ 人		

共同研究機関（協力機関）	（帯広市図書館）	研究区分	研究 ◯ ／ 試験 ／ 調査 ◯ ／ 分析	研究期間	15年度～19年度
				全体所要額（千円）	1,055（一財 1,055　）

研究の概要

○研究背景
・研究のニーズ
吉田巌(1882～1963)は、長く帯広などでアイヌ児童を対象とした小学校の教員を勤め、地域のアイヌ文化・歴史の調査を続け、多くの資料と著作を遺した。地域のアイヌ文化に根ざした学習・伝承活動のための資料が求められている現在、これらの吉田巌関係資料の全体像を把握し、利用しやすいかたちに整備していくことには重要な意義がある。
・道が取り組む必要性
吉田巌の旧蔵資料の多くは帯広市図書館に寄贈され、同館において整理及び活字化の事業が進められているが、これ以外にも、十勝をはじめとする道内・外の各地に重要な関係資料が散在している。これらを含めた全体的な収集・整理・分析には全道的な視点と立場による事業の推進が有効であり、道立という公的な立場と専門性を有する機関が取り組む必要性の高い課題である。
・関係機関等との連携・役割分担
帯広市図書館との連携のもと、相互の役割分担（研究センターは他機関所蔵資料の調査収集と総合的な整理・分析を主に行う）を図りつつ事業を進めた。
・これまでの研究成果・知見、外部機関の知見等の活用の考え方
アイヌ文化研究者として吉田巌の名は比較的知られているが、その関係資料の全体像が整理されたことはなく、帯広市図書館でも遺稿資料を順次活字化し「帯広叢書」として公刊しているが、資料全体との関連付け等の情報は未整備であった。本研究課題では、これまでの情報の集約を行いつつ、それらを踏まえた総合的な整理と情報提供を行った。

○研究目的
・遺稿資料のほか他機関所蔵の関係資料を含めた全体を見通す資料の収集と整理分析を行い、アイヌ史・アイヌ文化研究のための基礎的条件の整備を図る。

○研究内容
・帯広市図書館所蔵の吉田巌遺稿資料を中心に、他機関所蔵資料の調査・収集を行い、これらの資料の総合的な整理・分析等を進めるとともに、総合的な索引の作成など検索方法を整備する。

研究の果

○直近の研究課題評価における総合評価意見及びそれに対する取り組みの状況（直近評価に対する対応の適切性）
〔直近評価における総合評価〕「資料の一層の充実が図られていることから、今後成果が着実に見込まれる。」
〔対応〕当初計画どおり事業を進め、成果のとりまとめとして、新たに確認された情報・資料を盛り込んだ『吉田巌書誌』（内容については後述）を公刊し、関係機関等に配付した。

直近の研究課題評価結果
平成18年度中間評価
【自己評価】Ⓐ B C
【総合評価】Ⓐ B C

○研究開始後の事情変更の有無及び対応の状況（状況変化への対応の適切性）
特に大きな事情の変化はない。当初の予想以上に各地に関係資料が散在していたが、資料調査の回数を増やす等により対応した。

○年次別目標とそれに対応する実績及び研究成果（目標の達成度）

主な目標（項目）［　年次　］（事前評価時点）	（直近評価時点における変更点）	研究目標に対応する実績等（事後評価時点）
予備調査（他機関所蔵資料の所在調査等）、帯広市図書館所蔵資料の調査　［平成15年度］	（特に変更なし）	予定どおり進捗した。他機関所蔵資料については、幕別町、森町、虻田町、東京都等の所在を明らかにすることができた。
帯広市図書館所蔵資料の調査及び他機関所蔵料の調査と調査データの整理　［平成16～18年度］	（特に変更なし）	予定どおり進捗した。
成果のとりまとめ　［平成19年度］	成果のとりまとめの具体的な内容を、吉田巌の著作、関係文献目録、帯広市図書館所蔵吉田巌遺稿資料の概要等を中心とした「吉田巌書誌」とした。	予定どおり進捗し、吉田巌の著作目録、吉田巌の関係文献目録、帯広市図書館所蔵吉田巌遺稿の概要等を掲載し、さらに既存の吉田巌関係出版物の細目、帯広市図書館以外の関係資料の状況等についての情報をまとめた『吉田巌書誌』を発行し、関係機関に配付した。

○研究に係る資源配分の妥当性（研究資源配分の妥当性）
当初から帯広市図書館をはじめとする関係機関の所在調査及び内容確認に重点を置いた事業計画・予算配分であったことは、本課題が基礎的資料調査とその整理の比重が高いことに照らして適切であった。また成果を、各種の目録等のデータを一冊にまとめた「書誌」として発行する事業計画としたことは、成果を使いやすいかたちで関係機関等に提供できた点で適切であった。

成果の活用策

○活用される分野及び具体的な活用方策（成果の活用の可能性）
成果をまとめた『吉田巌書誌』は、アイヌ文化研究者であり「アイヌ小学校」の教員でもあった吉田巌に関するデータを俯瞰できる点で、今後のアイヌ文化研究、アイヌ史研究、郷土史研究に活用され得るものである。
○今後の対応
『吉田巌書誌』には盛り込めなかったデータも若干残っており、また今後他の研究課題を通して関係情報が集積されることも予想されるが、これらは引き続き研究センターにおいてアイヌ文化研究の情報データベースとして蓄積を図り、アイヌ文化の伝承・学習・研究等の諸活動において参照・活用されるよう整備を進める。

【個別評価】a・b・c				
	直近評価に対する対応の適切性	【 a 】	資源配分の妥当性	【 a 】
	状況変化への対応の適切性	【 a 】	成果の活用の可能性	【 a 】
	目標の達成度	【 a 】		

【自己評価】Ⓐ・B・C
【説　明】
本課題は、吉田巌に関する膨大な資料を所蔵館等と協力のもと整理し、その関連等を明らかにし報告書も刊行したことから、当センターはもとより、他の研究者、関係機関、学習者にも提供することのできた有意義な調査研究であった。

追跡評価の必要性
当初の目的を達成し、報告書の刊行により普及も図られたことから、追跡評価は行わない。

【総合評価】Ⓐ・B・C
【意　見】本研究では、関係機関と連携のもと、吉田巌遺稿資料を中心としたアイヌ文化研究における貴重な資料の総合的な整理・分析を行っており、成果は『吉田巌書誌』としてまとめられるなど、目標を達成し、十分な研究成果が得られている。

追跡評価の必要性
本成果は、アイヌ文化研究・アイヌ史研究等のための基礎資料であり、追跡評価の必要性はない。